唐代の科挙と文学

著■程千帆
訳■松岡栄志
町田隆吉

凱風社

唐代の科挙と文学

著■程千帆
訳■松岡栄志
町田隆吉

凱風社

訳者紹介

松岡栄志（まつおか・えいじ）
1951年静岡県浜松市生まれ。東京教育大学文学部卒。東京大学大学院博士課程を経て、現在、東京学芸大学教育学部助教授〔中国古典文学担当〕。専攻は中国古典文学・中国語学。著書には『中国の古典文学』（共著・東大出版会）、訳書に『ことばと社会生活』（共訳・凱風社）などがある。

町田隆吉（まちだ・たかよし）
1952年埼玉県飯能市生まれ。東京教育大学文学部卒。筑波大学大学院博士課程を経て、現在、東京学芸大学附属高等学校教諭。専攻は中国史。論文に「前秦政権の護軍について――『五胡』時代の諸種族支配の一例」「五世紀吐魯番盆地における灌漑をめぐって――吐魯番出土文書の初歩的考察――」などがある。

唐代の科挙と文学

一九八六年一〇月一〇日初版第一刷発行

定価――二八〇〇円
著者――程千帆
訳者――松岡栄志／町田隆吉
装丁――蔵前仁一
発行者――小木章男
発行所――株式会社凱風社
104 東京都中央区銀座一―二〇―二一
電話（〇三）五六七―五〇三〇
振替口座 東京五―八八七一五
1090-860322-1136
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

本文印刷――平河工業社
付物印刷――東光印刷
写植――ローヤル企画
製本――石津製本
用紙――中庄

日本語版序

一九四七年、武漢大学に赴任し、教鞭を執り始めたある日、たまたま王摩詰［維］の「綦毋潛の落第して郷に還るを送る」詩に話が及び、さらに沈確士［徳潛］の「反復曲折し、落第の人をして絶えて怨尤無からしむ」という評語にも説き及んだ。ところが、居合わせた学生諸君のいずれもが、この評語が難解だと音をあげた。そこで唐代の科挙制度とその風習についてひとわたり諸書を渉猟し、跋一篇を著して彼らに示したのである。だが、その折には詳細に検討する時間をもたなかった。

その後、このテーマについていささか検討を加え、十年の歳月をへて、唐代の進士行巻の風習及びそれと文学の発展との関係について、その大略をまとめることができた。

ところが、反右派闘争が始まり、身に覚えのない罪状によってとがめられ、牛や鶏を追い、薪をひろい米をえりわける労働生活を余儀なくさせられた。春夏秋冬、わが意にかなう日は一日とてなく、何につけても他人の指図を受けねばならなかった。

やがて、文化大革命の嵐とともに、狂人の如き若者たちが暴虐の限りを尽くし、天下は乱れし糸の如く、学究の徒は、死地へと追い込まれた。彼らが目の敵とねらうこの文章を顧みる暇なぞ、全くありえなかったのである。

やがて暗雲が吹き払われ、日月星辰が再び輝きをとりもどすと、群凶は根だやしにされ、わたしもまたもとの学究生活にもどることができた。

一九七八年、南京大学へ転任すると、旧稿のうちで焚書の禍を免れた残巻を取り出し、修改を施して定稿とした。さらに二年の後、ついに出版の機会を得、国内外の研究者に教えを乞うことになった

のである。

思うに、筆を染めし頃から数えて、はや三十数年の月日が流れている。ああ！　かくも辛苦をなめ、かくも幸いを得し文章よ。

先頃、松岡・町田の両氏が、拙著の不充分な点をいとわず、日本語に訳してくださった。そしてわたしに序文をと言ってこられた。せっかくの御申し出でもあるので、このごくささやかな書物の辛苦と幸運とを思い起こし、筆のままに記してその責めを塞ぐこととした。

一九八二年秋九月

程　千帆　南京にて序を記す

時に七十歳

＊『唐詩別裁集』の語。

＊＊「王摩詰《送綦毋潛落第還郷》詩跋」（一九四七年二月、武昌）『古詩考察』三一八～三三〇頁に所収。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目
次

日本語版序　程千帆――I

第一章　問題のありか――1

第二章　行巻の風習の由来――7

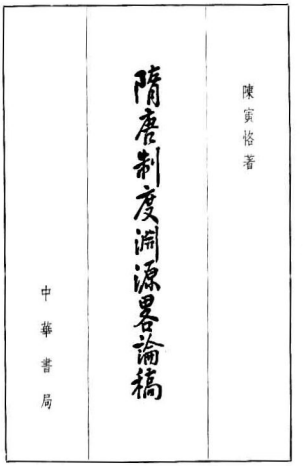
第三章　行巻の風習のようす――31

第四章　受験者と名士の行巻に対する態度と文学の発展との関係――67

第五章　唐代の文学と科挙との関係を論じた諸説の検討――105

第六章 行巻が唐代の詩に与えた影響——129
第七章 行巻が唐代古文運動に及ぼした影響——149
第八章 行巻の風習の盛行と唐代伝奇小説の勃興——175
第九章 結論および余論——193
訳者後記——199
付録／科挙史話——科挙制度の創設210／唐長安城略図223／唐代官職表（中央政府部分）224／唐代詩人生卒年表225
索引（人名・書名・事項）238

第一章　問題のありか



陳寅恪『隋唐制度淵源畧論稿』

行巻の風習について言及

唐代の進士科の試験については、両『唐書』『通典』『冊府元亀』『文献通考』『唐会要』などの書物に、すでにかなり詳細に記載されている。しかしこれらの書物は、おおむねこの制度についての叙述や評価を詳しく行っているが、この制度によって作り出されたいくつかの風習について言及することはむしろ少ない。たとえばこれからとりあげようとする行巻の問題は、『文献通考』が項安世の説を引くほかは、その他の書物で正面からとりあげられることはなかったようである。唐代の科挙を扱った優れた専著である徐松の『登科記考』は、その形式上の制限もあって、行巻というこの風習についてやはり系統的な検討を行わなかった。

次に、唐代の進士科の試験と文学との関係についていえば、これまでに断片的な見解を発表した人もなくはない。だが、かなり深くほりさげた研究を行ったのは、むしろ現代の学者たちである。陳寅恪・馮沅君などの諸氏には、この問題についての論考がある。[1] しかしながら、行巻という風習と文学の発展の関係については、これまでに発表された専門書や論文の中でも、全面的に論究されつくしたわけではない。

行巻が文学発展のカギ

私はこれまで文学や歴史の書物をひとわたり読むことにより、この問題に関するいくつかの資料を得た。そうして、唐代における進士の行巻の様子がおおむねどのようなものであったかが、いささか明らかになった。さらに一歩進んで、唐代の文学の発展を積極的に促進する働きをしたのは、決して進士科の試験制度そのものではなく、この制度のもとで形成された行巻という特殊な風習であったことを知るに至った。そこで今、試みに私の見解を以下に述べて、「進士科の試験と文学の関係」という問題に対して、専門に研究を進めておられる諸先生や文学研究者の方々にご教示をあ

両唐書（りょうとうじょ）
『旧唐書』（くとうじょ）と『新唐書』のこと。〔→18・22ページ〕

通典（つてん）
唐の杜佑の撰。二百巻。貞元一七年（八〇一）の成立。伝説上の唐虞から、唐の粛宗、代宗まで歴代の法令制度の沿革を記す。唐代の記述は最も詳しい。

冊府元亀（さっぷげんき）
宋の王欽若・楊億ほかの編。景徳二年（一〇〇五）の勅命を受け、大中祥符六年（一〇一三）に成立。千巻。真宗の勅命によって編纂された類書（百科全書）。古代から五代までの史料を三十一部、千四門に分けている。小説の類は収めていない。

文献通考（ぶんけんつこう）
宋末・元初の馬端臨の撰。三百四十八巻。『通典』にならい、さらに経籍・帝系・封建・象緯・物異の五門を増し、全部で二十四門とする。『通典』の古代から天宝年間までの記録に続いて天宝から南宋の嘉定年間（一二〇八～一二二四）末までについて記す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おぐことにした。

行巻という特殊な風習は、単に七世紀から九世紀にかけての我が国の選挙史［官僚登用制度史］や文学史において存在したのみならず、大いに盛行したものである。その特殊な風習を読者の眼前に再現しようと試みたために、引用が煩瑣にわたるのを免れなかった。同時に、現存の文献の限界と私自身の学識の限界のために、論述も緻密さを欠くことになった。諸賢の厳しい指正を仰ぐとともに、討論が今後も続けられんことを希望するしだいである。それによって、唐代文学研究においてこれまでなおざりにされてきた重要な問題に対して、かなり満足すべき解決が与えられんことを期待したい。

【一章の注】

(1)以下に列挙した文献を参照。

陳寅恪『唐代政治史述論稿』中篇「政治革命及党派分野」(一九四四年)

同『韓愈与唐代小説』(『哈佛亜細亜学報』Harvard Journal of Asiatic Studies 第一巻第一期、一九三六年、訳文は『国文月刊』第五七期、一九四七年に掲載)

同『元白詩箋証稿』第一章「長恨歌」(一九五五年)

同『読「鶯鶯伝」』(『歴史語言研究所集刊』第一〇本、一九四八年。また『元白詩箋証稿』第四章「艶詩及悼亡詩」の付録に見える)

施子愉『唐代科挙制度与五言詩之関係』(『東方雑誌』第四〇巻第八号、一九四四年)

李嘉言『詞之起源与唐代政治』(『文芸復興』中国文学研究号上、一九四八年。また『古詩初探』、一九五七年に見える)

馮沅君『唐伝奇作者身分的估計』(『文訊』第九巻第四期、一九四八年)

唐会要(とうかいよう)

宋の王溥らの輯。百巻。五百十四目。唐の蘇冕による『会要』四十巻(高祖から徳宗までの法令制度の記録)と楊紹復による『続会要』四十巻(徳宗から宣宗までの記録)に基づき、さらに宣宗から唐末までを補って完成した。

項安世(こう・あんせい)

?～一二〇八。宋、括蒼の人。字は平父。淳熙年間(一一七四～一一八九)の進士。官は秘書省正字。『易玩辞』『項氏家訓』がある。

徐松(じょ・しょう)

一七八一～一八四八。清の学者。字は星伯。直隷・大興(北京市)の人。嘉慶十年(一八〇五)の進士。官は楡林知府。地理に詳しく、清代の西北地方の歴史地理研究の先駆者とされる。『登科記考』のほかに『西域水道記』、『新疆志略』、『唐両京城坊考』、『漢書西域伝補注』などがある。

登科記考(とうかきこう)

清の徐松の撰。三十巻。高祖の武徳年間から哀帝の天祐年間まで、

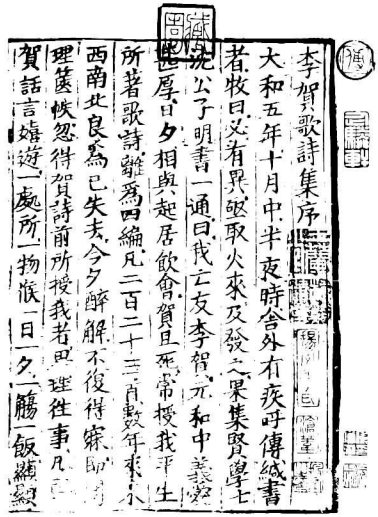
劉開栄『唐代小説研究』第一章「伝奇小説勃興三大因素――古文運動、科挙制度及仏教影響」（一九四七年）

張長弓『唐宋伝奇作者暨其時代』（一九五一年）

このほか、日本の鈴木虎雄に「唐の試験制度と詩賦」〔『支那文学研究』一九二五年、弘文堂〕という論文があり、張我軍が一九二九年三月三〇日の天津『益世報』附刊に訳載しているが、未見。

唐代の科挙及第者について詳細な考証を行っている。

第二章　行卷の風習の由来



李賀歌詩集序

大和五年十月中半夜時舍外有疾呼傳緘書者牧曰必有異堅取火來及發之果集賢學士[illegible]公子明書一通曰我亡友李賀元和中義熙[illegible]厚日夕相與起居飲食賀且死常授我平生所著歌詩雜爲四編凡二百二十三首數年來不西南北良爲已失去今夕醉解不復得寐即有理篋帙忽得賀詩前所授我者思逝往事凡[illegible]賀話言嬉遊一處所一物候一日一夕一觴一飯纏綿

李賀歌詩編

唐代の官僚登用制度の中では「事前運動」として有力者に送る行巻のできばえが合否を大きく左右した。それは、とりわけ貢挙の中で最も将来性があり、重視されていた進士科において顕著であった。というのは、文辞の優劣が合否決定に大きく関係していたからである。

いわゆる行巻とは、科挙の受験者が自分の文学作品に手を加え、清書して一巻にしたうえ、試験の前にそれを当時の政治・社会・文壇において高い地位を占めていた人たちに送ったもので、彼らから主司、すなわち試験を主宰する礼部侍郎に推薦してもらうことによって、[1]合格の可能性をいっそう高めるための一つの手段であった。これは、作品によって自分を売り込む手段でもある。しかもこの手段が存在し盛んに行われた理由は、行巻が当時の科挙制度と不可分のものであったからである。

平生のできが合否基準

もともと唐代の科挙の答案は、受験者の名前の部分をのりで封じなかった。[2]名前をかくさないので、どの年のどの科に誰が受験したか、また、どの答案が誰のものかについて、すべては明らかであった。このために、主試官［試験を主宰する官、すなわち礼部侍郎］が答案をじかに採点するほかに、受験者の平生の作品や評判を参考にしたり、はなはだしい場合はそれのみによって合否を決定する可能性も

礼部侍郎（れいぶじろう）
礼部は、唐代、尚書省（三省の一）に所属していた六部の一。礼楽・儀式・教育・国家の祭祀・宗教・外国との交際・科挙の試験などを掌った官庁。長官は礼部尚書。次官が礼部侍郎で、玄宗時代から吏部の考功員外郎に代わって科挙の試験を主宰した。

洪邁（こう・まい）
一一二三～一二〇二。南宋の文学家。字は景盧。別号は容斎、また野処。饒州・鄱陽（江西省）の人。官は端明殿学士。『容斎随筆』五集、『夷堅志』、『万首唐人絶句』を作る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com